

自蹊庵便り

平成二十八年皐月

NO 119

この春二つの物語

一つ目の物語 雪中茶事

長い間、心に温めていたこと、それは、利休さんの茶の湯に対する信条として詠まれた家隆卿の歌

―花をのみまつらん人に山里の

雪間の草の春を見せばやーという歌に込められている利休さんの思いに僅かでも触れることができたら…と。

十五年ほど前、やはり茶事行脚の途上でしたが、九頭竜川沿いに山越えをし福井に向かう途上、この歌と同じような情景に遭遇したことがあります。

なだらかな丘陵の形を残しながらも一面真っ白、その中にビツと真紅色の一群れ、四、五センチほどの芽吹きものに出逢いました。余りの美しさに思わず車を止め近づいてみますと、それはスイバの若芽でした。そう、スイバの芽吹きが紅いということも

始めて知りました。正確には紫がかった紅なのでしようが、一面真っ白な中ではより際立ち、真紅と云っても許されるほどの美しさでした。

利休さんは春の芽吹き、若草色を称えてのことだとは思いますが、それは黒楽の茶碗の中に抹茶を点てた一碗の世界と同じ美を見い出していることかどうかはわかりかねますが、わが身をそこに預けて一服の茶を点ててみたいという長年の夢であったものが、この春実現することができ、この上なき果報者にございました。

極寒の中のことゆえ、お齡を召した茶人をお迎えすることは申し訳なきことゆえ、元気な学生さん達がいいかも…と漠然とした思いを胸に、雪景色に連れられ車を走らせておりましたら、新潟県と福島県の県境近く、奥会津あたりにて高校を見つけ、駅に向かう下校時の子達に声をかけてみたら、

みんな快く「楽しそう」と即決！かくして雪中茶事の客は、仲良し三人組の女子高生と相成りました。

春の芽吹きとは、極寒の中、雪をもたげて、芽吹く命の力、それはこの子達そのものだ…と、この娘達の未来を祈り、一人ひとりの幸せを願い、心を込めて点てさせて頂こう…と、屈託なく眩しいほどの笑顔の娘達に出逢って、心に固く秘めての雪中茶事にごさいました。

一服の前に何か温かいものを…と、みぞれ鍋をみつくろい、足許にある一掬いの馳走なれば、不足だらけの調いにごさいますのに、声に出して喜び、一口一口を楽しんでいる三人娘達、心からあるがままを楽しみ、興味深く質問を投げかけてくる娘達、何と理に叶った茶人ぶりであろうか、聞いてみれば一人の娘は、原発事故の被災者でおじいちゃん、おばあちゃんを含め家族七

人で、この雪深い山間に移り住むことになったとか、友達二人は大学に進学だが、私は長女なので地元就職が決まっているとか、明るく咄される少女の笑顔に救われながらも、ああ、この娘達は春に卒業したら別れが待っている、良い想い出になってくれそうです。今の友情を大切に宝物にして、きっと強く生きてほしいと願いつつ…。

雪中茶事も刻々と日は傾き、冷えかえるなか、どこまでも朗らかに笑い声絶えることなく楽しんでおられ、三人三様の笑顔と姿、もったいないほどの二刻にございました。

お茶とは、茶道とは、茶事とは…、一言も疑問を抱かず、会話と一服を楽しんでくだされた、誠に見事な茶人ぶりに頭を垂れるばかりの余情残心にございました。

二つ目の物語 大衆演劇 鈴丸座長

雪国から帰り、中二日おいて千葉は柏の葉公園にある日本庭園の中の茶室、松柏亭にて雛の茶事にございました。雪中茶事の

道具を車から降ろし、雛の節句道具を屋根裏の物置から出し、また車に積んで出かけるも、慣れた仕事とはいえ、さすがに少々疲れを感じ、夜は温泉につかりながら、朝五時起き市場への買い出しのため早く寝ることにしていたのですが、疲れていたせいもあり、見るともなしにブーツとその温泉にたまたまかかっていた大衆演劇を見ておりました。

始めは風呂上がりのラフな格好で気楽に見ていたのがいつの間にか背筋をピンと伸ばし正座して見ておりました。

それは舞台で舞われておられる方の気高さと気品に満ちた姿に圧倒されることにございます。気がついてみると助手のMさんも同じ思いのようで…。見終わってから「なんだか解らないけど襟を正したくなりますよね…」と耳許で囁かれ、ああ、同じ思いで見てくれていたのだ…と。

日頃、仕事柄、魚にしか惚れない私がこの齢にして、大衆演劇に感動し涙を流すという行為に自分でも驚いております。

その舞いと所作の美しさ、演劇と踊り、

二時間半というものの引きつけてやまない舞台にすっかりと魅せられてしまいました。疲れというものを知らぬかのように、お人を逸らさせないお一人お一人に丁寧な対応と気遣い、茶事の振る舞いの原点を見る思いにございました。

後で知り得たことですが、昼夜二回の芝居も踊りも一つとして同じものはなく、衣装しかり、色使い、結び帯の形一つ一つが美しく洗練されていて、三十日の間、中日一日だけ休むという、このプロフェッショナルな一流の意識に脱帽です。

気高さと気品に満ち、天与の美しさを賜ったこの女性は二十六歳にして一座の座長を勤め、その使命感を一心に背負っておられる、まさに天から与えられた任務のように。その人の名は鈴丸さん。断りもなく名を覚えて出させて頂くことをお許しく下さい。

茶事というおもてなしの原点を、まさかのまさか、大衆演劇の中に見つけるなどと思っても寄らぬことにございました。

折しも大病から九死に一生を得、喜びも

東の間少しづつリユーマチの忍び寄る心地
 するこの頃であつてみれば、この後、何年
 立ったり座つたりと一足立ちやしなやかな
 所作ができることやら：とおぼつかない日
 々も只中、単純に感動し、その美しさに涙
 するひとときは、無条件に活力を与えてく
 れました。

お人を逸らさず、ユーモアを忘れぬしな
 やかさど、常に真剣勝負で臨まれるその姿
 勢に、千回を越える三十年やり続けてきた
 私の茶事の働き事も、この気高き座長の一
 回分にも及びません。比ぶべきことでもあ
 りませんが…。

若き座長を支える一座の皆様心意気と
 温かさ、多くの感動をありがとうございま
 した。一回でも多く目に触れ、心に触れ、
 活力とさせて頂きたく願つております。

ささやか乍ら遅ればせ乍ら、お人に活力
 を与える側の人間でありたいという新たな
 る目標を持つことができました。心より感
 謝申し上げます。二つ目の物語おしまい。

余談ながら三月三十日の柏の舞台を後に
 し、四月一日から二十八日まで新潟は古町

劇場（新潟市中央区 古町演芸場…編集子
 注）での一ヶ月興業とか、ホームページで
 この記事をお目に留められたお近くの方は
 一度いらしてみてくださいませ。日本女性
 の所作の美しさを、指先から足の爪先まで
 学ばせて戴きました。鶴女の一声！

読んで得するおまけのページ

卯月

卯月とは卯の花の咲く月のことです。

つまり空木うつぎの花が咲き、山々の木々に白

い花が咲く頃は夏に向かう兆しです。卯

の花はそれに先駆けて咲く初夏の象徴で

す。

四月の卦は乾けんいてん为天  上も下も天

で、これは全陽を表しております。全納

にして、最強の月であることを意味して

いるそうです。森羅万象すべてのものが

活力に満ちあふれる月なのですね。この

陽の気を深く吸って元気を戴きましよ

う。

因みに四月は高い山に登る行事が各地
 であるとか、これは上も下も天である四


月にあやかっつて、天に少しでも近づきた
 いというする願望なのだそうです。

皐月

五月の皐月は早苗月のことで、田植えが

終つて青々とした早苗田を目にする恵み

月です。易では四月の全陽から一陰が兆

す天てんぷうこう風ふうこう姤  と云い、陰陽の出会い

月とされています。四月の力の満ちた勢

いから少し物事を静かに見つめる空気、

静けさを受け入れることを求める月だそ

うです。

初夏の食材（四月・五月）

海の幸

玉筋魚 鱒 鯛 鱧 蛸 烏賊 鱒

穴子 鱧 蝦蛄 初鯉 真魚鯉

山の幸

独活 松露 菜の花 茗荷丈 山葵

キャベツ 馬鈴薯 蚕豆 筍 花山椒

露

桜鯛とは

この時期、瀬戸内で獲れる鯛を特に桜鯛

と呼びます。桜の花が咲く頃獲れる鯛の

ことでもあります。産卵のため外界か

ら瀬戸内に入ってきたもので、一年中で最も美味、産卵前の性ホルモンの関係から体色が鮮やかになるのだそうです。そのことから桜鯛と呼ぶに相応しいですね。

桜鱒とは

虹鱒、姫鱒など鮭科の魚類ですが、桜の花の咲く頃に川を上り、そのまま川に留まって秋に産卵して一生を終えます。海でたつぷり栄養を蓄え、身が霜降り状になる四月頃の桜鱒は一年で最も美味です。拙庵でも雛の茶事的时候は必ず桜鱒を焼物に出すようにしています。旧暦でないとところが苦しい処で、新暦の三月初旬はまだまだ高値です。鱒を魚偏に尊いと書くのも、宮中への上巳の節句の折の献上物として、京に近かった琵琶湖からの鱒が使われたから…と勝手に理解しておりますが、中国から渡来した漢字だとすれば、はてさてどう辻褃を合わせましょうか。どなた様かお知恵を拝借乞い願います。

参考文献 日本料理伝統文化大辞典

京都教室の御案内

二回目の夏教室は朝茶を予定しております。

合宿ならではの四時半起床より六時席入りまでの準備の実習。本席・水屋・台所と三日間の実習にございます。

貴重な体験かと存じます。

御参加のほどお待ち申し上げます。

会費 二万円(三日分)

その他に宿泊費一泊五千円。

食事(賄い)一食五百円

一日のみの御参加、通いで御参加自由にお選び戴けます。

七月十二日～十六日

実習 十三・十四・十五日

段取り・片付け 十二・十六日

(段取り・片付けの参加は無料)

茶事教室の御案内

皐月の茶事(初風炉)

端午の節句によせ

三

五月八日(第二日曜)

五月九日(第二月曜)

席入 正午

点前担当・水屋実習者

午前九時

会費 一万円

水無月の茶事(花あそび)

六月十二日(第二日曜)

六月十三日(第二月曜)

席入 正午

点前担当・水屋実習者

午前九時

会費 一万円

お知らせ

毎月の献立の写真を御希望の方は、A4一枚にまとめたものを、一部200円でお分けすることができます。

発送は、次回の自溪庵だよりに同封する形の予定です。

ホームページで見ることが出来ませんが、御希望の方はファクスでお申し込みください。昨年十一月分より可能です。